

ナサニエル・ホーソーンとロマンスの地政学 ——『緋文字』を中心に

The Regional Identity of Nathaniel Hawthorne's Romance: A Regionalist Reading of *The Scarlet Letter*

若林麻希子

Makiko WAKABAYASHI

はじめに

Nathaniel Hawthorne は、今日、アメリカン・ルネサンス期を代表する作家として、文学史上、揺るぎない地位を確立しているが、そのキャリア形成は困難に満ちていたことが知られている。Nina Baym が *The Shape of Hawthorne's Career* において詳述したように、ホーソーンが職業作家を目指したアンテベラム期アメリカには、未だ、文学を安定的に支える環境が整っていなかった。出版産業が発展途上であったことに加え、文学的嗜好の変化、そして何より女性という新たな読者層が顕在化したことで、アメリカ文学は幾重にも過渡的な様相を呈していたのだ。

本稿の目的は、ホーソーンが *The Scarlet Letter* (1850) において独自のロマンス空間に到達するまでの歩みを辿ることによって、ホーソーン文学が内包する地政学的様相を明らかにすることにある。『緋文字』序文 “The Custom-House” において “[A] neutral territory, somewhere between the real world and fairy-land, where the Actual and the Imaginary may meet, and each imbue itself with the nature of the other” (28) と説明されるロマンスのテクスト性は、現実と想像の混淆を特徴としている。この混淆性の着想には、当時、文化的優位性を競い合っていたニューイングランドとニューヨークの地方主義的問題が深く関わっていた可能性がある。ピューリタンを祖先とする家系、またニューイングランドを題材とする作品を数多く執筆していることが強くニューイングランドを連想させるものの、ホーソーンは、作家としてのキャリアを蓄積する上で、ヤング・アメリカ運動をはじめとするニューヨーク由来の文化的影響を受けた作家でもある。ロマンスの言説的混淆性とは、ニューイングランドとニューヨークという対立する文化圏に身を置く経験によって醸成された、ホーソーン自身の文化的アイデンティティの表出ではないか。このことを検証することによって、ホーソーン文学のナショナルな意義を再考したい。

1. ホーソンと歴史小説

1828年の処女作 *Fanshawe* の失敗から2年間、ホーソンは小説の題材を求めて歴史関連の書物を読み漁ったことが知られているが、歴史小説に着手する選択は、ある意味、時代の必然だったともいえる¹。アメリカでの歴史小説の人気は、1820年頃に端を発し、1850年にはその頂点に達したとされている (Buell 283)。ホイッグ党法律家 Rufus Choate が、“The Importance of Illustrating New England History by a Series of Romances Like the *Waverley Novels*” (1834) と題する演説の中で、歴史を題材とした文学がナショナル・キャラクターの創生に貢献すると論じたように (Thomas 184)、歴史小説が国民文学創生への近道であるかのように考えられていた時代でもあった。チョートの脳裏には、歴史小説といえばスコットランド作家 Walter Scott が浮かんだようだが、ホーソンにとって最も身近な歴史小説の模範は、恐らく、Washington Irving だった。Lawrence Buell は、ホーソンをはじめとするニューイングランド作家が、ローカル・ヒストリーを題材とする歴史小説の手法を修得する背景に、アーヴィングの『スケッチ・ブック』の影響を見据えている：

Irving's settings were mostly British, but his overall approach and his two American tales greatly interested New Englanders. Longfellow, Hawthorne, and Whittier, for example, all considered writing works that would do for their region what “Rip Van Winkle” and “The Legend of Sleepy Hollow” had begun to do for the Dutch country of New York. Hawthorne's *Twice-Told Tales* and Whittier's *Supernaturalism of New England* reflect this plan, although Hawthorne's scope is broader and Whittier's more restricted—an amateur monograph on the state of regional superstition. (Buell 294)

歴史を小説題材として獲得することは、ホーソンにとって、作家としてのアイデンティティを確立する上で極めて意義深いことだった。それは、高尾直知が論じるように「時代精神を再構築し教訓を引き出す『モラル・ヒストリアン』としてのホーソンの成り立ち」(24)を決定づけたのであり、また現実と想像が混淆するロマンス空間の発見にもつながった (Baym 31)。しかしホーソンの歴史小説の背後にアーヴィングの影響を指摘するビュエルの見解を考慮するならば、ホーソンにとって歴史小説との出会いとは、語りの技法を見出す上でも重要であったはずだ。歴史小説と語りの技法について高尾はアレゴリーという観点から論じているが (32-33)、アーヴィングの“Rip Van Winkle”や“The Legend of Sleepy Hollow”との関連で考えるならば、ホーソンの歴史小説を特徴づけるもう一つの要素とは、やはり、民衆の視点ではないだろうか。

アーヴィングの歴史小説は、国史が抑圧するローカルな歴史を回復する意図を孕んでいる。例えば、“Rip Van Winkle”とは、単に(リップが寝過ごすことになる)独立革命のみ

ならず、1664年のイギリス領ニューヨークの設立といった歴史の変遷によって幾重にも上書きされることで見失われてしまったオランダ領ニューネザーランドの記憶を回復する物語である²。そしてその失われたアメリカの記憶を呼び覚ます語りを支えるのが民衆の視点なのであり、ホーソーンの歴史小説にも、歴史的瞬間を民衆の経験として語り直す手法を確認することが出来る。例えば“*The Gentle Boy*” (1832) では、17世紀マサチューセッツ湾岸植民地におけるクエーカー教徒迫害の歴史が、迫害によって孤児となった少年 Ilbrahim が媒体となって、クエーカー教徒への同情へと開かれてゆくピューリタン共同体の経験へと書き換えられる。Ilbrahim を養子に迎える Pearson 夫妻を疎外し、Ilbrahim に対する致命的暴行の舞台となったピューリタン共同体は、クエーカー教徒であり Ilbrahim の母である Catharine を「よりクリスチャンらしい精神 (“a more Christin spirit”)」³ で待遇するようになり、自らの不寛容を乗り越えてゆくのだ：

Every one spoke of her [Catharine] with that degree of pity which it is pleasant to experience; every one was ready to do her the little kindness, which are not costly, yet manifest good will; and when at last she died, a long train of her once bitter persecutors followed her, with decent sadness and tears that were not painful, to her place by Ilbrahim's green and sunken grave. (*TS* 138)

イギリス本国からのクエーカー教徒迫害停止の通告を無視して迫害を続ける植民地の権力者たちに対して、迫害の犠牲となったクエーカー教徒への同情や理解が浸透する共同体の姿を前景化することによって、クエーカー教徒迫害の史実を、正史では語り得ない民衆の経験として提示するのだ。

ホーソーン文学に対するアーヴィングの影響に関しては、スケッチ文学および自然描写の観点から指摘がなされてきた⁴。“*Sir William Phips*” (1830) において “The knowledge, communicated by the historian and biographer, is analogous to that which we acquire of a country by the map, -minute, perhaps, and accurate, and available for all necessary purposes, -but cold and naked, and wholly destitute of the mimic charm produced by landscape painting. . . . fancy must throw her reviving light on the faded incidents that indicate character, whence a ray will be reflected, more or less vividly, on the person to be described” (*TS* 12) と書いているように、ホーソーンにとって、歴史小説の創作とは、史実という「色褪せた出来事」を「人」を際立たせる言説へと加工すること、言い換えれば、歴史を人間によって実際に生きられた経験 (lived experience) へと翻訳することを意味し、その人間の営みに向けられる眼差しの模範を、アーヴィングの歴史小説言説の中に見出していたのである。

2. ホーソンと『デモクラティック・レビュー』

ホーソンは1830年から1837年の間に17世紀のニューイングランドを舞台にした9編の歴史小説を世に送り出すことになるが、その後の15年間、ニューイングランド・ピューリタンを題材にした物語を執筆することはなかった (Bell 45)。その間、ホーソンは、歴史小説だけではなく、スケッチ文学への関心を高めることになる。1832年には、ニュー・ハンプシャー、ヴァーモント、ニューヨークを旅し、その経験を旅行記“The Story Teller”として出版することを試みるが、Samuel Goodrichに拒絶され、計画は破綻した。Robert Milderは、ホーソンが、実際には写実主義作家になることを望み、写実主義作家たる素質から目を背けてしまった作家であることを例証する中で、そのような志を抱いていたホーソンにとって、“The Story Teller”こそが、ロマンスとリアリズムそれぞれの才能を融合させる絶好の機会となるはずだったにも関わらず、出版に漕ぎつけることが叶わなかったことが、ホーソンがその後のキャリアにおいてロマンスとリアリズムの分裂に苦しむことになる決定的な打撃になったと分析している (Habitations 54)。

ホーソンの作家としてのスタートが、このように決して芳しいものではなかったのは、作家個人の能力以上に、ニューイングランドの地域的事情によるものだった。1800年以降1830年までにはボストンがニューイングランド文学の中心地として頭角を現すものの、出版業ではニューヨークとフィラデルフィアに遅れをとっていた (Buell 35-36)。故郷セーレムを拠点に執筆活動に奮闘していたホーソンは、1830年から1837年の間、the *Youth's Keepsake*, the *New-England Magazine*, the *American Monthly Magazine*, そして the *American Magazine of Useful and Entertaining Knowledge* など、ボストンに拠点を構える、いずれも短命の雑誌に寄稿することしか出来ない状況だった。ボードン・カレッジ以来の友人である Horatio Bridge や Henry Wadsworth Longfellow の助力を得て、処女短編集 *Twice-Told Tales* の出版によりややく漕ぎつけることになるものの納得する結果は得られなかった。1851年に再出版された *Twice-Told Tales* の序文において、ホーソンが“The circulation of the two volumes was chiefly confined to New England; nor was it until long after this period, if it even yet be the case, that the Author could regard himself as addressing the American Public, or, indeed, any Public at all. He was merely writing to his known or unknown friends” (TS 1151) と振り返るとき、その言葉には1830年代のボストンの出版産業の未熟さと後進性に対する複雑な思いが宿っていたに違いないのだ⁵。

ホーソンが John L. O'Sullivan と出会い、彼の『デモクラティック・レビュー (the *United States Magazine and Democratic Review*)』に寄稿するチャンスを得るのは、ボストンでの作家活動に限界を感じていた矢先のことだった。Mary Silsbee の思わせぶりな態度によって決闘寸前になることもあったが、ホーソンと9歳年下のオサリバンは共に気の

合う同志となった (Wineapple, *Hawthorne* 107)。オサリバンの『デモクラティック・レビュー』は、第7代大統領 Andrew Jackson とそれに続く Martin Van Buren の民主党政権時代を背景に、ボストンを拠点とする『ノース・アメリカン・レビュー (*the North American Review*)』が体现する文芸・芸術分野におけるホイッグ党の優位を転覆することを目指して 1837 年 10 月にニューヨークで創刊された (Widmer 35)。『デモクラティック・レビュー』の創刊号を作成するにあたり、オサリバンらが、第6代大統領 John Quincy Adams に寄稿を求めたところ、文学は本来上流階級のものであるからデモクラシーとは相容れないと言って断られたという逸話が象徴するように、『デモクラティック・レビュー』におけるオサリバンの姿勢は、Edward Widmer が “Imitating Jackson and the generation of ‘76, O’Sullivan challenged the stuffy Anglophiles of the literary world as if they were the latest form of Tory” (38) と説明する通り、ボストンのハイブラウ文化への明らかな対抗であった。ニューイングランド文学がインターナショナルな視野に立って展開していたのに対して (Buell 371)、オサリバンと『デモクラティック・レビュー』が牽引するニューヨーク文学は、“literary exploration of pre-Columbian America, the Revolution, the unexplored West, Canada, and even South America (a literary expansionism prefiguring Manifest Destiny)” を奨励し、“the portrayal of the realistic elements of daily life, especially the new realism of urban America” を重要視した (Widmer 41)。語りの視点としての民衆の可能性を追求していたホーソーンにとって、『デモクラティック・レビュー』が目指す新しいアメリカ文学のヴィジョンは魅力的だった。ホーソーンは、1837 年 6 月 4 日のロングフェロー宛ての手紙において “Sometimes, through a peep-hole, I have caught a glimpse of the real world; and the two or three articles, in which I have portrayed such glimpses, pleases me better than the others” (qtd. in Widmer 72) と述べて、既存の文学ジャンルとは異なる新しい文学的实践へと歩みを踏み出している実感を表明している。

マイルダーが “Determined to write about the present just as he was to live in it, and publishing chiefly in the Jacksonian *Democratic Review*, Hawthorne found a subject in the tendencies of the age and an authorial role as commentator on America’s ongoing experiment in reform” (*Habitations* 72) と考察するように、ニューヨークに活動の場を得たホーソーンは、作品の主題として同時代アメリカ社会を積極的に視野に入れることになる。この時期のホーソーン作品をエッセイと認識するベイムは、そこにボストンとニューヨークの相対する価値観を行き来する言説の揺らぎを観察している: “His comments on the issues of the day steer a course between New York pragmatism and Boston idealism. He is a critic of society from a transcendental viewpoint (‘The New Adam and Eve’) and a critic of transcendentalism from a social pragmatic viewpoint (‘Earth’s Holocaust’)” (Baym 102)。この時期のホーソーン文学が、ボストンとニューヨークそれぞれの価値観を

行き来しながら体现しているのであれば、そこには作家としての葛藤も見え隠れしていたのではないだろうか。

ホーソーンは1837年から1845年までの間に24篇の短編とスケッチを『デモクラティック・レビュー』に寄稿する。『デモクラティック・レビュー』との関わりが、ホーソーンにとってニューイングランドの境界を越えた出版界への参入を意味したと Ginsberg が評価するように (198)、*Godey's Lady's Book* や *Graham's Magazine* といったフィラデルフィアを拠点とする格の高い雑誌に寄稿し、またヤング・アメリカ運動の立役者 Evert Duyckinck の *The Library of American Books* の企画に携わるだけでなく、*Mosses from an Old Manse* をそのシリーズとして出版することにもなる。ニューヨーク出版産業に文字通り魅せられたホーソーンだったが、その期待とは裏腹に、1841年の Brook Farm への参入、1842年から1845年に至るコンコードでのいわゆる「牧師館時代」における超絶主義サークルとの関わり、さらには妻 Sophia の姉 Elizabeth Peabody の仲介による児童文学への参入といった出来事を通して⁶、ニューイングランド文学の息吹、それはまさにのちに「アメリカン・ルネサンス」と呼ばれる文芸復興を予見する空気を身近に感じる環境にあった。

ホーソーンは、この時期、ニューイングランドとニューヨークの文化的対立の狭間で身構えるしかなかった。ウィドマーによれば、ダイキンクの *The Library of American Books* に、ホーソーンはニューイングランド作家との「リンク」として携わっていたという (が、Thoreau も Emerson も *The Library of American Books* に組み入れられることはなかった) (105)。Wineapple はまた、児童文学の可能性を察知して、ホーソーンがオサリバンに児童文学書をニューヨークで出版するよう提案することを考えたことがあったと証言している (Hawthorne 173)。*Mosses from an Old Manse* に収められているこの時期のホーソーンの作品、例えば、“The Birth Mark,” “A Select Party,” “Rappaccini's Daughter,” “Earth's Holocaust,” そして “The Artist of the Beautiful” といった作品では、ニューヨークが志向する大衆的価値観とニューイングランドが志向する理想主義的価値観が、相容れることなく対立する構造が多くみられることに思い当たる。ウィドマーは、“Rappaccini's Daughter,” “P's correspondence,” “Hall of Fantasy,” “A Select Party,” “Earth's Holocaust,” “The Old Manse,” “Procession of Life,” “Intelligent Office,” “Old Easter Dudley,” さらには *The House of the Seven Gables* の Holgrave にオサリバンの影を見出しているが (77-78)、“The Celestial Railroad” や “The Earth's Holocaust” ではエマソンや超絶主義が批判されている。*Mosses from an Old Manse* は、オサリバンのニューヨークとエマソンのニューイングランドとの間で、居心地の悪く自らの立場を決めかねているホーソーンの心理を反映しているのだ。

3. *The Scarlet Letter* のロマンス空間

The Scarlet Letter (1850) とは、ニューヨークとニューイングランドの文化的覇権抗争に対するホーソーンなりの応答と把握することが可能だ。『緋文字』とは、税関吏であり郷土史家でもあったとされる Mr. Pue が、Hester Prynne にまつわる記録や証言をもとに編纂した物語を下敷きにしたテキストだとされている：

There were several foolscap sheets, containing many particulars respecting the life and conversation of one Hester Prynne, who appeared to have been rather a noteworthy personage in the view of our ancestors. She had flourished during the period between the early days of Massachusetts and the close of the seventeenth century. Aged persons, alive in the time of Mr. Surveyor Pue, and from whose oral testimony he had made up his narrative, remembered her, in their youth, as a very old, but not decrepit woman, of a stately and solemn aspect. (25)

Mr. Pue が収集した記録は、ヘスター・プリンという一人の女性を扱う主題性、マサチューセッツ湾岸植民地というローカルな土地、さらにはその口承性に特徴を見て取ることが可能だが、それは同時に“the view of our ancestors”という共同体の視点・価値観を反映するものにもなっている。ヘスター・プリンの物語は郷土史そのものとして存在しているのであり、セーレム税関に保管されていた護民官時代の植民地の記録が独立戦争の動乱で紛失したことを嘆く語り手の心理を通して、ヘスターの物語は、護民官時代を網羅しつつ、植民地の正史の空隙を埋める、実際に生きられた経験としての歴史的価値が付与されているともいえる。

『緋文字』の語りの起源は、アーヴィングの歴史小説の手法を再び彷彿とさせる。オランダ領ニューネザーランドを起源とするニューヨークのローカル・ヒストリーを、国史に代わるもう一つの歴史、ハドソン川流域の人々が伝承として伝える実際に生きられた経験としての歴史言説として提示する手法を、ホーソーンはここで再び踏襲するのだ。“The Custom-House”では「白頭のワシ印」が市民に対する国家権力の暴力性を象徴するモチーフとして登場するが、市民を抑圧する国家という主題は、正史と郷土史の関係性の問題においても反復されている。Mr. Pue という郷土史家の存在も、アーヴィングの Geoffrey Crayon や Diedrich Knickerbocker といったペルソナを想起させる道具立てではないだろうか。

実際、『緋文字』とは、ニューイングランドの歴史を、ヘスター・プリンを巡る共同体言説によって語り直す試みと捉えることが可能である。物語がマーケット・プレイスに始まり、マーケット・プレイスで終わることの意義は、このパラダイム転換を強調することにあるように思われる。第2章で描かれるマーケット・プレイスではエリート支配階級と群衆が一体となるボストン共同体の均質性が強調されている。“Even had there been a

disposition to turn the matter into ridicule, it must have been repressed and overpowered by the solemn presence of men no less dignified than the Governor, and several of his counsellors, a judge, a general, and the ministers of the town; all of whom sat or stood in a balcony of the meeting-house, looking down upon the platform” (41) とあるように、群衆の中に絞首台に立つヘスターを嘲笑する傾向があったとしても、礼拝堂のバルコニーに鎮座する総督を始めとする権力者たちの厳粛な姿が、それを沈黙させている。

“When such personages could constitute a part of the spectacle, without risking the majesty or reverence of rank and office, it was safely to be inferred that the infliction of a legal sentence would have an earnest and effectual meaning. Accordingly, the crowd was somber and grave” (41) とあるように、エリート支配階級が勢揃いする場で下される判決が有無を言わせないものであることを察知している群衆は、その意図に従って暗く厳粛な様子を保っている。エリート支配階級と群衆が一体となって醸し出す圧力、それこそが追放者としてのヘスターの社会的地位を決定づけるのだ。

“In all her intercourse with society, however, there was nothing that made her feel as if she belonged to it. Every gesture, every word, and even the silence of those with whom she came in contact, implied, and often expressed, that she was banished, and as much alone as if she inhabited another sphere, or communicated with the common nature by other organs and senses than the rest of human kind” (56) とあるように、ボストンの人々の言動によって、ヘスターは、自らが空間的にも、言語的にもボストン社会から断絶されていることの自覚を突きつけられている。

群衆を圧倒するエリート支配階級の言説に対して、ヘスターは追放者として生きる日常から独自の言説空間を紡ぎ出すことになる。姦通の罪はボストン社会からの追放を意味するが、“It [Scarlet Letter] had the effect of a spell, taking her out of the ordinary relations with humanity, and enclosing her in a sphere by herself” (39) とあるように、ヘスターは逆に「独自の領域 (“a sphere by herself”)」を獲得する。ヘスターがディムズデルに対する愛情を守るために元夫 Roger Chillingworth に対抗する心理ドラマや、娘 Pearl を育てる母としての葛藤の物語が属するその領域は一見すると私的領域に見える。しかし、Brook Thomas が “Hawthorne does not, as many critics argue he does, retreat from public to private concerns, but instead tells the tale of how a ‘fallen woman’ finds redemption by helping to generate within a repressive Puritan community the beginnings of an independent civil society” (184) と見事に言い当てるように、『緋文字』とは、墮落した女性の私的な物語に留まっている訳でなく、新たな共同体のヴィジョンへと開かれる展開を示している。自らに “a Sister of Mercy” であることを課すヘスターは、たゆまない慈善の実践を通して、緋文字 A を姦通ではなく、有能 (“Able”) を表わす A と認

識する感受性を育むが(90)、そこから浮かび上がってくるのが、“It is our Hester, –the town’s own Hester, –who is so kind to the poor, so helpful to the sick, so comfortable to the afflicted” (100) と声を一つにする共同体の姿である。民衆が主体となるその共同体は、しかし、エリート支配階級の排除の上に成り立つものではない。“The rulers, and the wise and the learned men of the community, were longer in acknowledging the influence of Hester’s good qualities than the people. . . . Day by day, nevertheless, their sour and rigid wrinkles were relaxing to be an expression of almost benevolence” (100) とあるように、ヘスターの行いを認めることに抵抗があったエリート支配階級も、やがて彼女を慈悲の念をもって見守るようになる。トーマスが “Instead, it [*The Scarlett Letter*] illustrates how important it is for liberal democracies to maintain the space of an independent civil society in which alternative obediences and loyalties are allowed a chance to flourish” (185) と考察するように、“a Sister of Mercy” としてのヘスターは、17 世紀マサチューセッツ湾岸植民地に民主主義社会の萌芽があることを展望させるのだ。

『緋文字』を、建国神話ではなく、「市民神話 (“civic myth”）」(Thomas 184) と把握する視座を提供しているのは、慈善家としてのヘスターだけではない。姦通の罪を犯した墮落した女性ヘスターの物語は、社会の周縁で秘密裏に展開する性質上、社会性とは無縁であるようだが、実はそうではない。第 23 章において、ヘスターの愛情が、ディムズデールの告白によって、東の間とはいえ、家族像を成就することが、再び、ピューリタン社会に変化をもたらすからだ。ディムズデールの胸に刻印された緋文字 A を巡る後日談は、ピューリタン社会が、その存在を否定する側とその存在を認める側に二分されたことを伝えている。ディムズデールの罪を否定するのは “these highly respectable witnesses” (154)、即ち、エリート支配階級である。一方、『緋文字』は、ディムズデールの罪を認める側の視点を通して物語を進めることになるが、そのことは、“The authority which we have chiefly followed, –a manuscript of old date, drawn up from the verbal testimony of individuals, some of whom had known Hester Prynne, while others had heard the tale from contemporary witnesses, –fully confirm the view taken in the foregoing pages” (153) とあるように、エリート支配階級の言説を、民衆の言説によって転覆させることを意味している。エリート支配階級が、絞首台でのディムズデールの行為から “the mighty and mournful lesson, that, in the view of Infinite Purity, we are sinners all alike” (152) を導き出すのに対して、『緋文字』は、“Be true! Be true! Be true! Show freely to the world, if not your worst, yet some trait whereby the worst may be inferred!” (153) と民衆と声をひとつにするのである。

『緋文字』冒頭のマーケット・プレイスにおいて、エリート支配階級の空気に従順であった民衆は、物語終盤のマーケット・プレイスでは、ヘスターとディムズデールが体现する自

由恋愛の価値観に開眼し共感する共同体へと変貌するのだ。そこでは Pearl も “the elf-child” (69) として疎外されることはなく、“she would grow up amid human joy and sorrow, nor forever do battle with the world, but be a woman in it” (151) とあるように、人間社会への復帰が約束される。チリングワースがパールに遺産を与えることも、ディムズデルとヘスターを結ぶ愛情を肯定する行為と受け取ることができる。イギリスからニューイングランドに帰還したヘスターが、男女の関係がお互いの幸福の上に成り立つ社会の実現を未だ目標として女性たちの相談を受ける暮らしを送ることは、ピューリタン社会の限界を示唆するが、緋文字伝説の “a motto and brief description” (155) を刻印する墓石は、ヘスターの意思を継ぐ共同体の存在を密かに伝えている。トーマスが “It should come as no surprise then that the novel’s power comes more through its love story than through its politics, or perhaps better put, its politics reminds us of the importance love stories have for most citizens’ lives” (185) と指摘するように、『緋文字』は、自由恋愛への共感をピューリタン社会における民主主義の胎動として描き出すのである。

おわりに

“The man who wrote compellingly of a sense of place could find none for himself” というワインアップルの言葉が端的に言い表しているように (“A Brief Biography” 40)、アンテベラム期アメリカとは、職業作家としての成功を目指したホーソンにとって、極めて居心地が悪かったに違いない。それは Christopher C. Apap や John McWilliams を始めとする多くの研究者が例証するように⁷⁾、国民文学創生への政治的、文化的要請がありながら、文学が未だ地方主義の枠を超えていないことに原因があった。アンテベラム期のアメリカ文学とは、「アメリカらしさ」を主張する地方主義文学の集積だったのだ。既に触れたように、「アメリカ」を巡る文化的優位性を最も激しく競い合ったのがニューイングランドとニューヨークだった。Moore によればセーレムはもともと政治的、宗教的に分断された土地だったというが (169-98)、そのような環境で育ったホーソンでも、ニューイングランドとニューヨークのどちらが、作家としての成功に導いてくれる土地であり得るかを見極めることは殆ど不可能だったに違いない。このことを象徴しているのが『緋文字』に至るホーソンのキャリアであり、また『緋文字』序文 “The Custom-House” において、作家としてのアイデンティティを、セーレムのホーソン一族の血筋から切り離し、Mr. Pue、即ち、緋文字伝説収集家であり、元セーレム税関吏である以外に素性不明の郷土史家との神秘的契約関係に位置づけ直すことによって確立しようとするホーソンの思惑である。“I am a citizen of somewhere else” (33) とは、故郷セーレムとの決別宣言である以上に、地方主義

的しがらみを超えた作家となる意思表示として響く。

17世紀マサチューセッツ湾岸植民地に民主主義社会の萌芽を見出す『緋文字』は、ニューイングランドの土地に、ニューヨーク的な価値観を移植する錯誤を演じるテキストである。それはホーソーンが、現実と想像が混淆するロマンス空間を、地方主義的境界を解体し、新たな時空間を創造する地政学的転回のメディアとして掌握したことを意味している。佐久間みかよは、Ralph Waldo Emerson が、講演者として訪れた西部でアメリカの多様性への認識を新たにすると指摘するが（『個から群衆へ』96）、ホーソーンは、ニューイングランドとニューヨークの相反する文化圏を行き来することによって、地域の集積としてのアメリカというヴィジョンを獲得し、それをロマンス空間に展開してみせたといえないだろうか。

『緋文字』は、結果的に、ボストンの Ticknor and Fields から出版された。ギンズバークは、この Ticknor and Fields による『緋文字』の出版こそが、作家としてのホーソーンの状態を確定したと考察している。ハードカバーに金文字の体裁が作家の質を体现し、アメリカ文学を代表するホーソーン像を作り上げたというのである。ホーソーンは、『緋文字』の中で地方主義的葛藤を超越する新たな言語空間を生み出したが、ナサニエル・ホーソーンという作家は、彼自身が、ニューイングランドとニューヨークが文化的対立関係を越えて協働した結果、存在し得たことを忘れることはできない。ロングフェローが、George Washington Green に宛てた 1839 年 6 月 23 日付の手紙の中で “The *Loco-focos* are organizing a new politico-literary system. They shout Hosanna to every *loco-foco* authorling, and speak coolly of, if they do not abuse, every other. They puff Bryant loud and long; likewise my good friend *Hawthorne* of *Twice-Told Tales*” (qtd. in Moore 170) と書いているように、ニューヨークのオサリバンと『デモクラティック・レビュー』との関係を深めてもなお、ホーソーンに対するニューイングランドの関心が衰えることはなかった。ロングフェローは、実際、「牧師館時代」、経済的危機に陥ったホーソーンを助けるためにニューヨークのダイキングに接近したこともあった (Wineapple, *Hawthorne* 186)。『緋文字』の出版も、ロングフェローの出版社となることによって 1846 年以降に影響力を増した Ticknor and Fields が、James T. Fields を通して、ホーソーンを獲得した成果であった⁸。『緋文字』とは、まさに、アメリカ文学が地方主義的葛藤から解放される歴史的瞬間を刻印する作品だったのではないだろうか。

註

1. 例えば Bell, pp. ix-x を参照。
2. この議論に関しては、若林「失われた歴史のテロル」参照。
3. Nathaniel Hawthorne, *Tales and Sketches*, p.138. 以下、この版からの引用は、本文括弧内に TS と頁数を記すこととする。
4. スケッチ文学については Hamilton、自然描写に関しては Petersheim を参照。
5. ボストン出版業界とホーソーンのキャリアの関係については、Buell の他に Ginsberg、Winship を参照。
6. この辺の事情は Laffrado を参照。
7. Apap と McWilliams の他に、Gould、Nissenbaum、佐久間『個から群衆へ』および「Ralph Waldo Emerson のレクチャー」、そして若林「国民文学創生と文化的覇権闘争」を参照。
8. この辺の事情は Wineapple, *Hawthorne* の Chapter Fifteen “Scarlet Letters” を参照。

参考文献

- Apap, Christopher C. *The Genius of Place: The Geographic Imagination in the Early Republic*. U of New Hampshire P, 2016.
- Baym, Nina. *The Shape of Hawthorne's Career*. Cornell UP, 1976.
- Bell, Michael Davitt. *Hawthorne and the Historical Romance of New England*. Princeton UP, 1971.
- Budick, Emily Miller. “Hawthorne, Pearl, and the Primal Sin of Culture.” *Journal of American Studies*, vol. 39, no. 2, 2005, pp. 167-85.
- Buell, Lawrence. *New England Literary Culture: From Revolution through Renaissance*. Cambridge UP, 1986.
- Elbert, Monika M., editor. *Nathaniel Hawthorne in Context*. Cambridge UP, 2018.
- Franzosa, John. “‘The Custom-House,’ *The Scarlet Letter*, and Hawthorne’s Separation from Salem.” *ESQ*, vol. 24, 1978, pp. 57-71.
- Ginsberg, Lesley. “Hawthorne and Print Culture.” Elbert, pp. 193-204.
- Gould, Philip. *Covenant and Republic: Historical Romance and the Politics of Puritanism*. Cambridge UP, 1996.
- Hamilton, Kristie G. “Hawthorne’s Literary Sketches.” Elbert, pp. 218-28.
- Hawthorne, Nathaniel. *The Scarlet Letter and Other Writings*. Edited by Leland S. Person. Norton, 2017.
- . *Tales and Sketches*. Edited by Roy Harvey Pearce. The Library of America, 1982.
- Laffrado, Laura. “Hawthorne’s Writings for Children.” Elbert, pp. 229-39.
- McWilliams, John. *New England’s Crises and Cultural Memory: Literature, Politics, History, Religion 1620-1860*. Cambridge UP, 2004.
- Milder, Robert. “Hawthorne and the Problem of New England.” *American Literary History*, vol. 21, no. 3, 2009, pp. 464-91. JSTOR, www.jstor.org/stable/20638603.
- . *Hawthorne’s Habitations: A literary Life*. Oxford UP, 2013.
- Moore, Margaret B. *The Salem World of Nathaniel Hawthorne*. U of Missouri P, 1998.

- Newberry, Frederick. "A Red-Hot A and a Lusting Divine: Sources for *The Scarlet Letter*." *The New England Quarterly*, vol. 60, no. 2, 1987, pp. 256-64. JSTOR, www.jstor.org/stable/365609.
- Nissenbaum, Stephen. "New England as Region and Nation." *All over the Map: Rethinking American Regions*, Edward L. Ayers, Patricia Nelson Limerick, Stephen Nissenbaum, and Peter S. Onuf. Johns Hopkins UP, 1996, pp. 38-61.
- O'Malley, Maria. "Taking the Domestic View in Hawthorne's Fiction." *The New England Quarterly*, vol. 88, no. 4, 2015, pp. 659-680. JSTOR, www.jstor.org/stable/24718884.
- Petersheim, Steven. "Hawthorne and Natural Landscape." Elbert, 376-85.
- Reynolds, Larry, editor. *A Historical Guide to Nathaniel Hawthorne*. Oxford UP, 2001.
- Ryskamp, Charles. "The New England Sources of *The Scarlet Letter*." *American Literature*, vol. 31, no. 3, 1959, pp. 257-72. JSTOR, www.jstor.org/stable/2922524.
- Stubbs, John C. "Hawthorne's *The Scarlet Letter*: The Theory of the Romance and the Use of the New England Situation." *PMLA*, vol. 83, no. 5, 1968, pp. 1439-47. JSTOR, www.jstor.org/stable/1261317.
- Thomas, Brook. "Citizen Hester: *The Scarlet Letter* as Civic Myth." *American Literary History*, vol.13, no.2, 2001, pp. 181-211. JSTOR, www.jstor.org/stable/3054601.
- Widmer, Edward L. *Young America: The Flowering of Democracy in New York City*. Oxford UP, 1999.
- Wineapple, Brenda. "Nathaniel Hawthorne 1804-1864: A Brief Biography." Reynolds, pp. 13-45.
- . *Hawthorne: A Life*. Random House, 2003.
- Winship, Michael. "Hawthorne and the 'Scribbling Women': Publishing *The Scarlet Letter* in the Nineteenth-Century United States." *Studies in American Fiction*, vol. 29, no. 1, 2001, pp. 3-11.
- 佐久間みかよ『個から群衆へ——アメリカ国民文学の鼓動』春風社、2020年。
- .「Ralph Waldo Emerson のレクチャー “The Young American” をめぐる出版事情」『和洋女子大学紀要』第56集、2016年3月、pp.17-27。
- 高尾直知『モーニングはホーソンによく似合う』中央大学出版部、2020年。
- 若林麻希子「失われた歴史のテロル——ディートリッヒ・ニッカーボッカーのニューヨーク探索」下河辺美知子編著『アメリカン・テロル』彩流社、2009年、pp.53-72。
- .「国民文学創生と文化的覇権闘争——セジウィックの『リンウッド家』における建国の地政学」『アメリカ研究』第51号、2017年3月、pp.139-159。

* 本研究は JSPS 科研費基盤研究 (C) 17K02553 の助成を受けたものです。